

高校のキャリア教育の現状

進まない現実。生徒の進路選択能力育成は先送り？

リクルート「2010年高校への進路指導に関する調査」より

角田浩子 リクルート「キャリアガイダンス」編集長

小誌165号にて既報の全国学長アンケートによれば、「社会的・職業的自立に向けた指導等(キャリアガイダンス)」を制度化した大学設置基準の改正について、大学学長はキャリアガイダンス推進を義務づけることに8割が賛成していた。大学生の自立意識や社会性低下への危機感からキャリア教育の必要性の認識は高く、実際にカリキュラムへの導入も進んでいることが確認された。

一方、高校ではどうだろう。高校進路指導の専門誌「キャリアガイダンス」が昨年全国の高校の進路指導主事を対象に実施したキャリア教育に関する調査結果から、高校の現状を見ていく。

「2010年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」

<調査概要>

調査対象: 全国の全日制高校4981校の進路指導主事
 調査期間: 2010年10月8日～10月22日
 (11月1日到着分までを集計対象とした)
 調査方法: 郵送法
 回収数: 1240(回収率24.9%)
 有効回答数: 1208(有効回答率24.3%)
 回答者平均年齢: 47.57歳

1 新学習指導要領に対する対応度

「対応できていない」が4割弱

記載内容の認知にも疑問

本調査では、2009年に公示され、2010年から実施となった高校学習指導要領にキャリア教育推進が明文化されたことについて、自校のキャリア教育がどの程度対応しているかをたずねてみた。すると、新学習指導要領に「十分対応できていると思う」はまだ7%と少なく、「ある程度対応できていると思う」が54%と過半数を

占め、2つを合わせた「できている・計」は61%となった(図表1)。設置者別にみると、国公立では66%が「できている・計」と回答したのに対し、私立では48%と半数を下回った。

これは高いのか低いのか。まず調査設計段階での高校教員へのヒアリングで、新学習指導要領の記載内容を知らないことが予想されたため、調査票に条文*を記載したという経緯がある。9月の調査時点では

で実施段階とされる学習指導要領への対応の度合いが、回答者の主観とはいえ「対応できていない」が4割弱とは、キャリア教育への取り組みは、高校では関心度も実践も低調ととらえてよいだろう。「まったく対応できていない」回答者の自由記述にあった「そこまで手がまわりません。忙しくて」という声に象徴される、高校現場の実態をさらに調査結果から見ていきたい。

図表1 自校のキャリア教育の新学習指導要領に対する対応度 (全体/単一回答) (%)

	n	できている・計		できていない・計		無回答	いる・計	いていない・計
		十分対応できていると思う	ある程度対応できていると思う	あまり対応できていないと思う	まったく対応できていないと思う			
2010年: 全体	1208	7.0	54.4	33.4	3.7	1.5	61.3	37.2
大短進学率別								
70%以上	501	8.2	52.5	33.5	3.6	2.2	60.7	37.1
40~70%未満	255	7.5	51.4	36.5	3.5	1.2	58.8	40.0
40%未満	443	5.4	57.8	31.8	4.1	0.9	63.2	35.9
設置者別								
国公立	900	8.4	57.1	30.2	3.1	1.1	65.6	33.3
私立	299	2.7	45.5	43.5	5.7	2.7	48.2	49.2

2 キャリア教育担当部署の設置状況・実施時間 担当部署なしが16%

3分の2は進路指導部が担当

キャリア教育の担当部署の設置状況をたずねたところ、最多は「進路指導担当部署が兼ねている」67%で、前回よりも6ポイント増加(図表2)。「担当する部署はない」は前回よりも8ポイント減少しているが、依然16%、6校に1校も存在している。大短進学率別にみると、「担当する部署はない」が高

いのは進学率[70%以上]。設置者別にみると、私立が国公立に比べ高い。

ちなみに担当部署の名称をたずねたところ、「キャリア教育部」「キャリア支援部」「キャリアガイダンスグループ」など「キャリア」を冠した高校は7%程度だった。

実施は「総合学習」「LHR」で

どの時間にキャリア教育を実施して

いるかを聞くと、「総合的な学習の時間」74%、「ロングホームルーム(LHR)」67%に回答が集中(図表3)。「普段の学校生活全般の中で」は4分の1に留まっており、教科や学校行事なども全般的に低い水準だ。学習指導要領は「学校の教育活動全体を通じ」て推進していくことを求めているが、主観ではなく実態としても対応していないことがここから読み取れる。

図表2 キャリア教育担当部署の設置状況 (全体/単一回答) (%)

	n	進路指導担当部署が兼ねている	進路指導の業務を含んだ担当部署を設けている	進路指導とは別の部署・組織を設けている	担当する部署はない	その他	無回答
2010年: 全体	1208	66.8	6.5	6.1	15.8	3.4	1.4
2008年: 全体	910	61.1	5.4	6.0	24.1	0.5	2.9
大短進学率別							
70%以上	501	66.3	5.6	6.2	17.4	2.8	1.8
40~70%未満	255	69.0	8.2	5.1	12.9	3.9	0.8
40%未満	443	65.9	6.5	6.3	16.0	3.8	1.4
設置者別							
国公立	900	66.8	7.2	6.8	14.8	3.1	1.3
私立	299	66.6	4.3	3.7	19.4	4.3	1.7

図表3 キャリア教育実施時間 (全体/複数回答)

	調査数	総合的な学習の時間	ロングホームルーム	中で	普通段の学校生活全般の休みなど	長期休暇(春・夏・冬)	教科の時間	修学旅行や遠足	学校行事	文化祭や体育祭などの	ショートホームルーム	キャリアガイダンスを内容とする学校設定科目授業時間	生徒会活動	部活動の時間	宗教・道徳などの時間	その他	特に実施していない	無回答	キャリア教育実施・計
2010年: 全体	1208	73.5	67.4	25.7	21.1	15.2	10.9	8.4	7.0	5.7	4.6	4.1	1.3	5.9	4.1	0.6	95.4		
2008年: 全体	910	62.4	56.7	-	-	12.2	-	-	-	-	2.6	2.4	-	12.0	12.3	2.2	85.5		
【2010年属性別】																			
大短進学率別																			
70%以上	501	73.3	66.7	19.6	23.4	12.2	13.4	8.2	7.4	2.2	4.4	3.8	2.2	5.2	5.6	1.0	93.4		
40~70%未満	255	80.8	70.6	24.7	21.6	13.7	10.2	6.7	5.9	6.3	3.9	3.1	0.8	7.1	2.4	0.4	97.3		
40%未満	443	69.8	66.4	33.4	18.3	19.6	8.8	9.7	7.4	9.5	5.2	5.0	0.7	5.9	3.2	0.2	96.6		
設置者別																			
国公立	900	77.9	67.7	27.9	22.7	18.0	11.6	9.8	6.7	6.2	5.3	5.1	0.7	5.6	3.0	0.4	96.6		
私立	299	60.5	66.6	19.4	16.4	7.0	9.4	4.3	8.4	4.3	2.3	1.0	3.3	6.7	7.0	1.0	92.0		

*「2010年: 全体」の降順ソート ※「-」は該当項目なし ※【2010年属性別】は、「2010年: 全体」より5ポイント以上高い数値に網掛け

3 キャリア教育に対する考え

「教員の負担増」を危惧

キャリア教育のわかりにくさも浮彫りに

キャリア教育の推進が低調な理由として、高校教員のキャリア教育への考えの反映があるのではないかと懸念されている。

8つの選択肢から、自分の考えに近いと思うものをすべて選んでもらったところ、最も多かったのは「生徒にとって有意義だと思う」53%というキャリア教育への肯定的な意見だったが、前回より4.3ポイント減少。

同様に「望ましい進路指導が実現できそうな期待がもてる」という意見も減少し、3人に一人程度となっている。

今回増加したのは、キャリア教育について後向きととれる意見。「提唱されている内容どおりに現場が取り組むとしたら、教員の負担は相当大きくなりそうだ」43%が2位、「学校現場で浸透するかどうかは未知数」40%が3位となった。

また、基本的な理解が十分に進ん

でいない状況も見受けられ、「進路指導や職業教育と『キャリア教育』の違いがわからず、主旨が見えない」や「『キャリア教育』の意味がわからない」が増加している。

経年で見ると、「教員の負担増加」「主旨が見えない」は4年間でそれぞれ9ポイント、8ポイントも増加している。「現場の多忙感」と「キャリア教育のわかりにくさ」を抱えている進路指導担当の先生方が増加しているのだ。

フリーコメント キャリア教育に対する考え:「最も」そう思う理由

①生徒にとって有意義

・将来へ夢や展望をもつために、具体的な内容を学習可能である(東北/専門)
・学力、意欲の低下に歯止めをかけるには、生徒が学ぶことの意味を考える場が必要だから(九州・沖縄/普通)

②教員の負担は相当大きくなりそう

・「キャリア教育」の幅が広すぎる上、校内の活動だけでおさまらず、ほかの教育活動との併立が難しい。準備もする余裕なし(南

関東/普通)

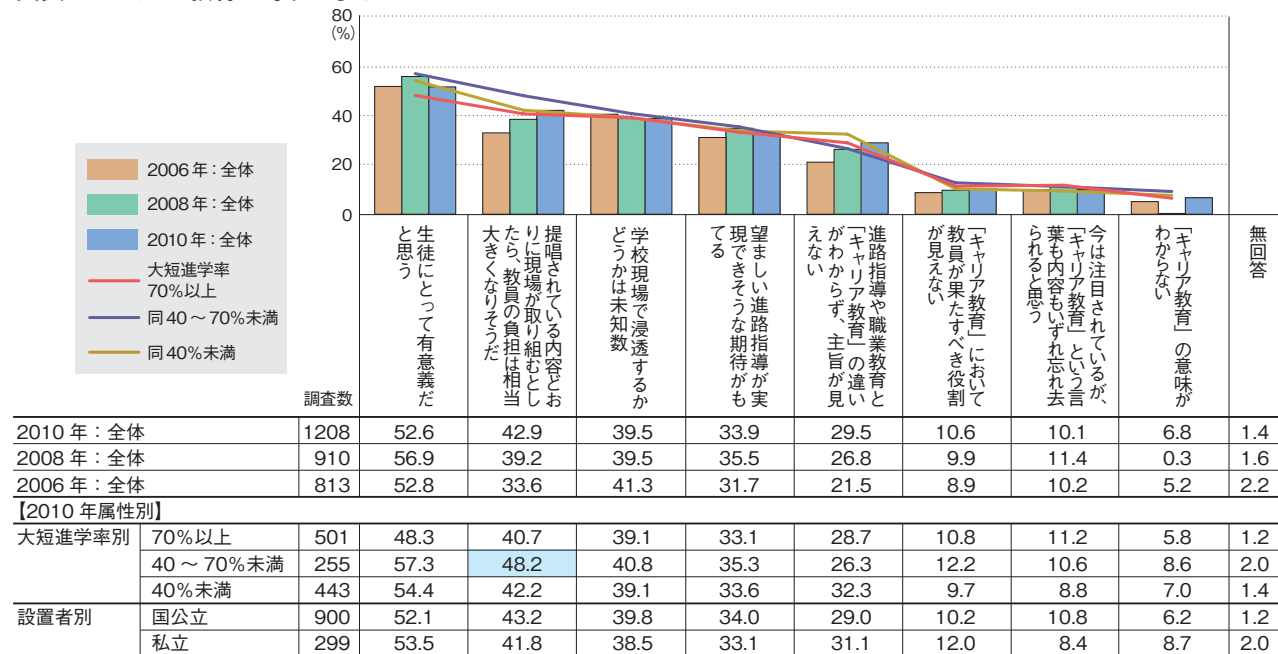
・担当部署は、内外の連携、対応、資料情報の収集など、教師は指導法など、研修、研鑽の必要性が出てくる。教科、生徒指導もあるので、追いつかない(九州・沖縄/普通)

・現在も同様のことをしているが、企画、運営を担当する者、担任などの負担は相当なものである(四国/総合)

③学校現場に浸透するかは未知数

・目標が大き過ぎ、小目標を設定しづらいので実感、もしくは評価し

図表4 キャリア教育に対する考え (全体/複数回答)



※「2010年: 全体」の降順ソート ※【2010年属性別】は、「2010年: 全体」より5ポイント以上高い数値に網掛け

にくい(中国/専門)

・意義はあるが、多くの者が真の意味を理解していないので(北海道/普通)

④望ましい進路指導が実現できそうな期待

・これまでと言ってきた内容が明文化されたことにより、校内においても意識されるようになり、より推進しやすくなったため(九州・沖縄/普通)

・学年進行に伴い、3年間、生徒が意識しながら取り組めば、生徒の進路意識は相当高まり、自己実現能力も身につくと思われる(関西

/普通)

⑤違いがわからず主旨が見えない

・以前から学校全体で取り組んでいることとの違いがわからない(九州・沖縄/普通)

・職業教育とキャリア教育の違いがなかなか理解できない(東海/専門)

・キャリア教育と学問の関係がわかりづらい。職業教育(就職指導)と進学指導とキャリア教育をはっきり区別していない。キャリア教育の幅が広い(九州・沖縄/専門)

4 進路指導の難易度

「非常に難しい」が増加

私立より国公立で困難な状況

そこで、進路指導担当教師たちが置かれている状況をさらに見ていく。

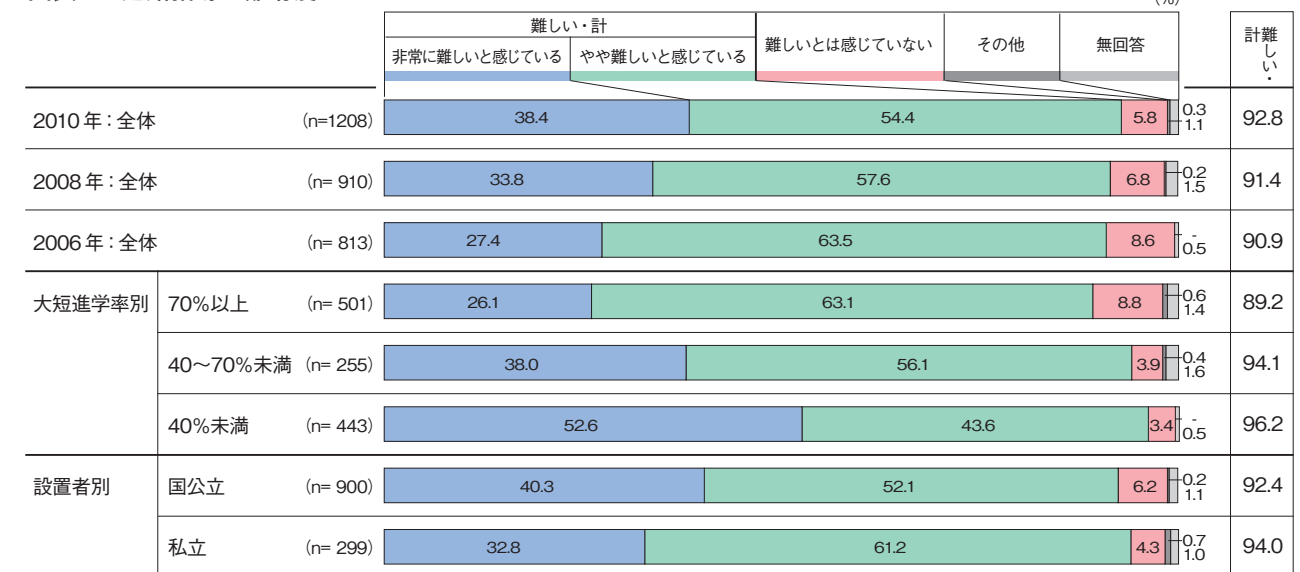
現在進路指導を難しいと感じて

いるかという質問に、回答者の38%が「非常に難しい」と回答。「やや難しい」の54%と合わせると9割以上が進路指導を難しいと感じている。過去調査と比べると、「非常に難しい」が毎回増加。高校現場にお

ける進路指導の難しさが06年以降高まっている様子が見えてくる。

大短進学率別では進学率が低い高校ほど、設置者別では私立より国公立で「非常に難しい」と感じる割合が多い。

図表5 進路指導の難易度 (全体/単一回答)



5 進路指導の難しさの要因

1位は生徒の「進路選択・決定能力の不足」

経済の悪化が直撃

現在の進路指導を「非常に難しい・やや難しい」と回答した人にその要因をすべてあげてもらったところ、最も多かったのは「進路選択・決定能力

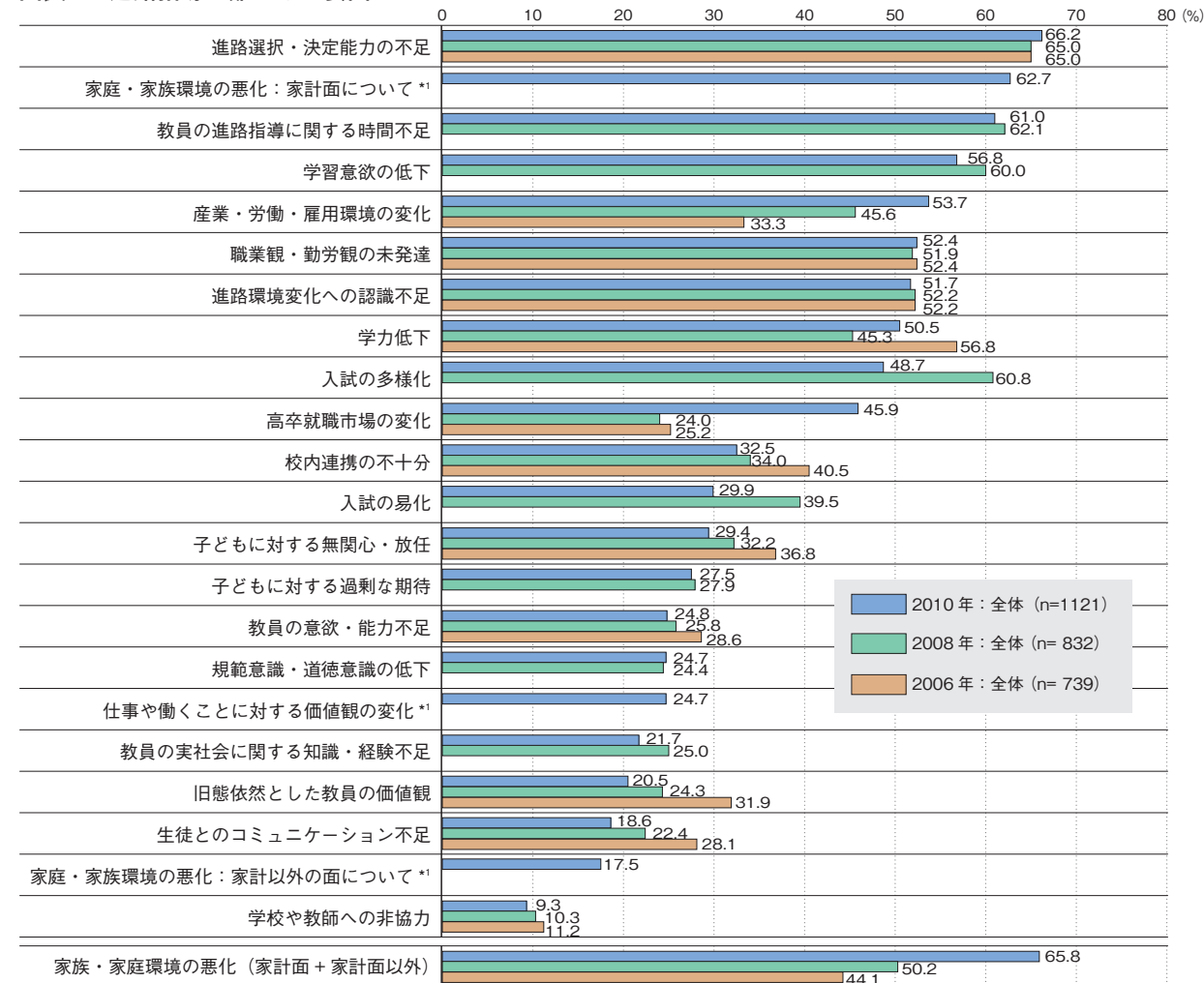
の不足」66%。以下、「家庭・家族環境の悪化(家計面)」63%、「教員の進路指導に関する時間不足」61%と続き、いずれも6割を超えた。

前回と比べ大幅に増えたのは「家庭・家族環境の悪化・計(家計面+家

計面以外)」、「産業・労働・雇用環境の変化」「高卒就職市場の変化」。リーマンショック以降の経済の悪化が進路指導を直撃しているのだ。

大短進学率別にみた進路指導の難しさの要因上位3項目は以下のとおり。

図表6 進路指導の難しさの要因 (進路指導は難しいと感じている者/複数回答)



※[2010年:全体]の降順ソート *1は初調査項目

40%以上が進学する高校の進路指導の最大の課題は、実は生徒自身の「進路選択・決定能力の不足」であることがわかる。
【70%以上】

- ①生徒の進路選択・決定能力の不足

- ②教員の進路指導に関する時間不足
 - ③入試の多様化
- 【40~70%未満】

- ①生徒の進路選択・決定能力の不足
- ②家庭・家族環境の悪化(家計面)

- ③学習意欲の低下

【40%未満】

- ①高卒就職市場の変化
- ②家庭・家族環境の悪化(家計面)
- ③産業・労働・雇用環境の変化

フリーコメント 生徒が要因でどのような困難が生じているか

①進路選択・決定能力の不足

【大短進学率70%以上】

・進路に関するさまざまな情報を、生徒自らが積極的に得ようとする姿勢が大変弱いように感じます。情報は与えてもらうものだと考えているようです(関西/普通)
・まじめで素直な生徒が多いが、半面自発的に進路を考え、自ら決定することに慣れていない。敷かれたレールがないと行動できない(南関東/普通)
・自分の進路について、自分も生活の中で情報を収集し、選択し、決定す

るという主体的行動がとれないことが多い(中国/普通)
・生徒が自分で調べる、考える力が低下している。教員が一から教えてあげる必要が生じている(四国/総合)
【大短進学率40~70%未満】
・安易な進路選択。推薦に流れる(南関東/普通)
・生徒が、今、目の前のことだけに夢中になり、先を見て進路を決定しない。安易に指定校を選ぶ。大学を退学する場合も(南関東/普通)
・生徒、保護者が、自分のこととしてとらえていない。他人事のようにである(北海道/総合)

②学習意欲の低下

【大短進学率70%以上】

・AO入試や、指定校など学力が不足していても、合格できる入試に、本人、保護者とも頼ってしまい、入学後のことまで考えた進路指導がしにくい(関西/普通)
・併設大学があるため主体的に自分を追い込んで学習しなくても大学に進学できてしまう(南関東/普通)
・中高一貫校で高校入試を経験していないので、年々学習意欲が低下している。目標もぎりぎりまで決定できない(東北/普通)
・知的好奇心の欠如による知りたい学びたいという態度がうすれ、与えられた教材で満足している。それにより、大学で何を学びたいか、その意欲がわからない生徒が増加(九州・沖縄/普通)
・復習、家庭学習をしないため、知識が定着せず、受験期に入ってもい

つまでも基礎力を確立できない生徒が増加している(南関東/普通)
・将来への目的意識をもてず、学習に対する意欲が低い(南関東/普通)
【大短進学率40~70%未満】
・努力もせずに、すぐに志望校をあきらめてしまう。一般入試を避けて、推薦、AO入試にとびついてしまう(中国/普通)
・学習しなくとも入れる上級学校が出てきているが、進学してから苦戦している(東北/普通)
・学習に限らず、さまざまな事象に対して興味、関心がなく新たに何かを得ようという意欲に欠けるため、各種プログラムの意義を理解できない(四国/総合)
・働きたくないし勉強もしたくない生徒たちが多く、頑張らせるための動機付けがきわめて難しい(南関東/普通)

6 キャリア教育を進めて行くうえでの障害 「時間・予算」の不足、「負担」の大きさ

体制づくりはまだ

進路指導の最大の課題が「生徒の進路選択・決定能力の不足」であれば、まさにその育成をするキャリア教育こそ必要とされるはずだが、進んでいない現状が確認された。

そこでキャリア教育を進めて行くうえでの障害を、自由記述で改めて

寄せてもらった。目立ったのは「実施時間の不足」や「予算」の問題。教科や行事との関係でなかなか時間が確保できないといったことや、実践には経費がかかるが、その手当てができないなど、実施しようとして改めて意識された問題も多く見受けられた。
また「教員の負担は大きくなりそ

うだ」を裏づけるコメントも多く、多忙な業務の中でどう実践していこうかと戸惑う様子が見られる。
同様に「主旨が見えない」「意味がわからない」に関連するコメントも多い。進路指導担当者自身も、そして周囲にも、十分に理解している教師はまだ少ないと思われる。

フリーコメント どのような障害があるか

①実施時間の不足

・時間の確保。HRで活用できる時間は限られている。放課後は生徒が参加しにくい。現在土曜日に体験学習をしているが、今後土曜がどうなるか未知数(関西/普通)
・他の行事との関係で、十分な時間がとれない(南関東/普通)
・教科学習の時間を確保するために、キャリア教育のうち、イベント的なもの、体験的な活動を十分に行うことが難しい(南関東/普通)
・普通高校の場合学習時間の確保という視点から考えるとこれ以上キャリア教育に割り当てる時間的な余裕がない(東海/普通)
・学力向上のための学習時間の確保と部活動の練習時間の確保で生徒の活動はいっぱいである。どのようにしてキャリア教育の時間が生み出せるのか不安(東北/普通)

②教員の負担の大きさ

・教員の(進路指導、教科指導による)多忙さ(東北/普通)
・教員一人ひとりの負担が増えること(東海/総合)
・人員が不足している、アイデアも不足している(東北/普通)
・教員が忙しすぎる。余裕がなく計画したり、研究したり、組織化することが難しい(東海/普通)

③何をやるにも予算がネック

・活動予算、教員の定数減少による時間的問題点(北海道/普通)
・動こうとすると経費がかかるが、予算がなかなかつかない(東北/専門)
・予算がたりない。外部からの人を招いて講義をしてもらうのに、公費からほとんど謝礼が出ない。本校のようにOB組織がしっかりしていれば人材を捜せるが、そうでないと外部から人を呼ぶのは難しい(南関東/普通)
④今の体制のままでは限界
・人員、予算の配当がないまま行っている。無理を続けていける体力が今の学校(教員)にはない(関西/普通)
・教員間での意義の共有と協力体制の確立(九州・沖縄/普通)
・教員の連携不足(九州・沖縄/普通)
⑤教員の知識・理解不足
・教員の意識・・・就職選択=キャリア教育という公式から頭を変えられない、教員のビジョンのない指導(東海/普通)
・キャリア教育=出口指導という思い込み(関西/総合)
⑥実はよくわかっていない・・・
・「キャリア教育」の定義やイメージが、つかみにくい(関西/普通)
・「キャリア教育」について、よく理解できていない教職員の存在(関西/普通)

7 進路指導時に生徒の進学先として重視する点 「学生の面倒見が良いこと」が2位

生徒に学びたいことがあるのか？

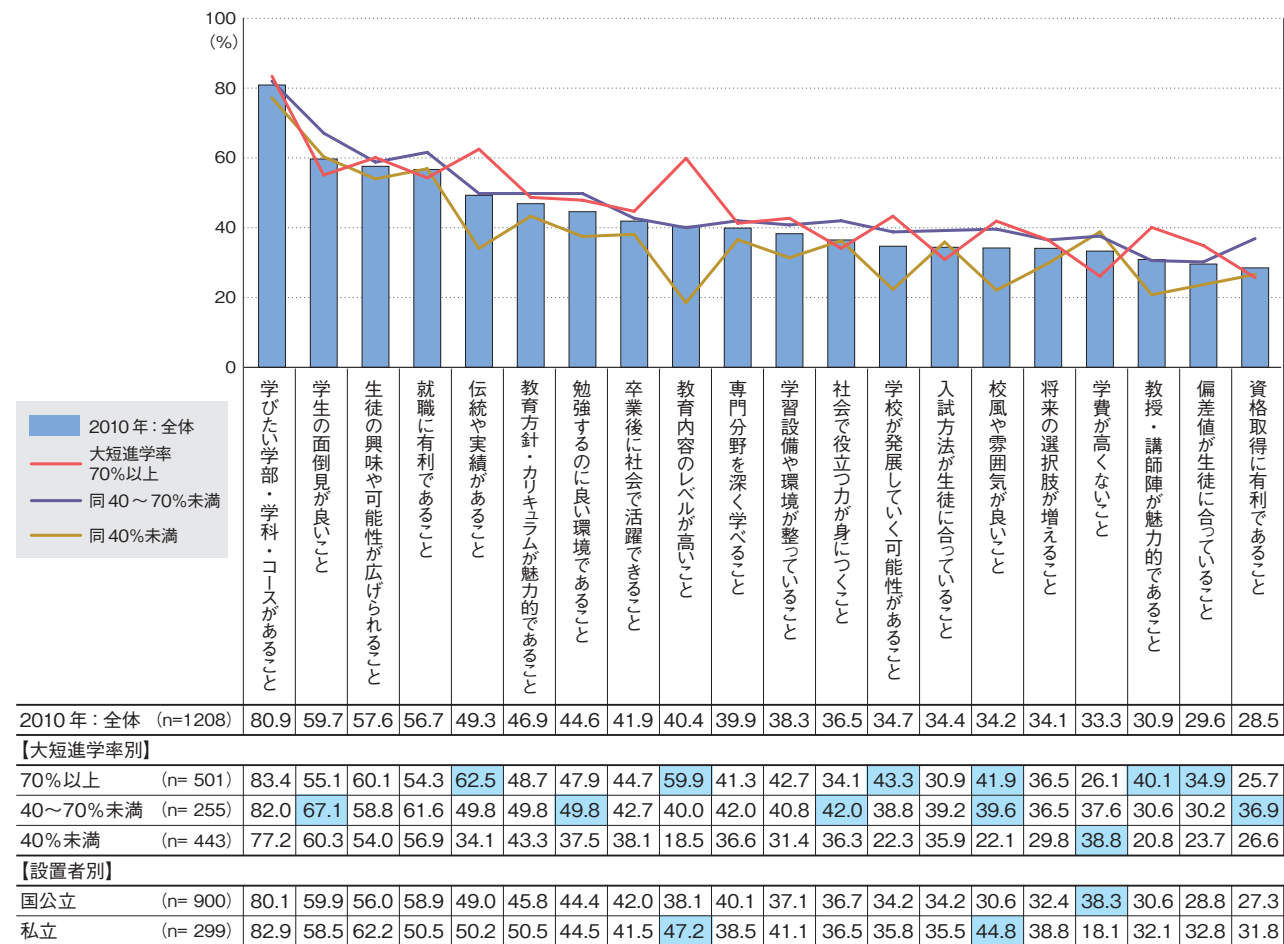
「生徒の進路選択・決定能力の不足」を課題としながらもキャリア教育に取り組めていない現状のまま、教師たちは進学先として大学のどのような点を重視するのかをたずねた。トップは「学びたい学部・学科・コースがあること」81%、2位は「学生の面倒見が良いこと」60%。以下、「生徒の興味や可能性が広げ

られること」58%、「就職に有利であること」57%と続く。

大短進学率別にみると、いずれもトップは「学びたい学部・学科・コースがあること」②「伝統や実績があること」③「生徒の興味や可能性が広げられること」、【40～70%未満】と【40%未満】では②「学生の面倒見が良いこと」③「就職に有利であること」となっている。

そもそも生徒たち自身に確固とした「学びたい」学部・学科・コースがあるのが気になるところだ。まして「面倒見が良い」ことを大学に求めているのは、生徒たちの主体的な選択・決定能力の育成を大学に先送りしていることにならないだろうか。高校側の大学を見る目を、そのまま高校側の指導を見直すことに振り戻してほしいと思えるのだがいかがだろうか。

図表7 進路指導時に生徒の進学先として重視する点 (全体/複数回答)



※「2010年:全体」の降順ソート ※「2010年:全体」より5ポイント以上高い数値に網掛け

8 大学・短大に高校現場が期待すること 「わかりやすい学部・学科名称」を

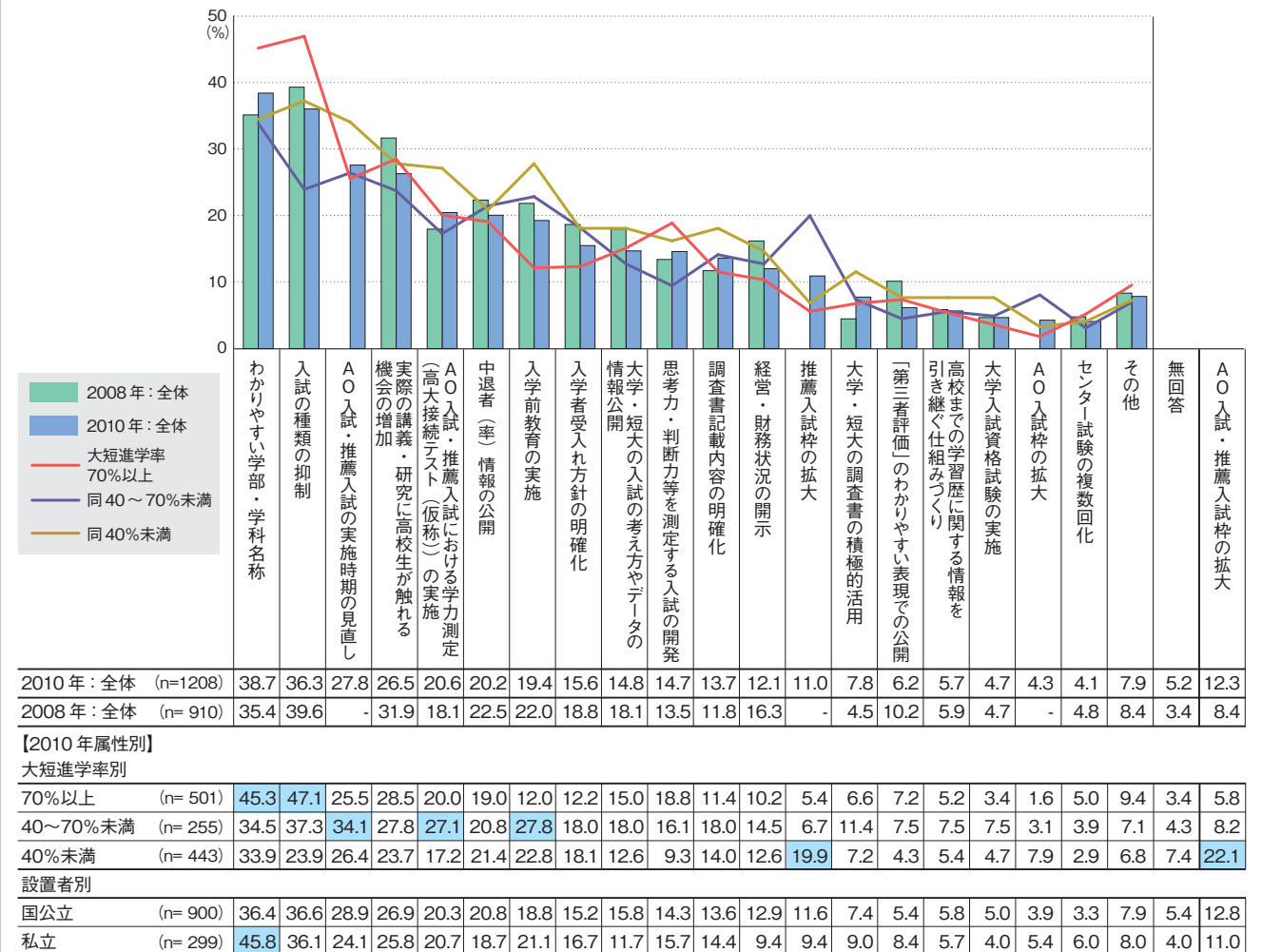
学力向上も大学で

続いて、高校現場が高大接続・連携の観点から大学・短大、文部科学省に期待していることを見ていく。トップは「わかりやすい学部・学科名称」39%、ついで「入試の種類の抑制」36%。前回と1位、2位が逆転した。また今回新しく追加した「AO入試・推薦入試の実施時期の見直し」が28%で3位となった。

大短進学率別にみると、進学率【40～70%未満】で「AO入試・推薦入試の実施時期の見直し」「AO入試・推薦入試における学力測定の実施」「入学前教育の実施」が他層に比べ高くなっている点特徴的。進学希望者の多くがAO・推薦入試で入学する高校の場合は、学力的な面も大学で把握・指導してほしいという要望が見える。

● 高校現場は飽和状態にある。生徒たちへの指導課題は高校から大学に持ち越される。この理解の上になって初めて、高校への情報提供や、高大連携の具体的な施策が考えられるべきだろう。とくに、社会に人材を送り出す最終教育機関として、高校といかにキャリア教育を接続していくかは、大学の大きなテーマといえるのではないかと。

図表8 高大接続・連携/大学・短期大学・文部科学省に期待すること (全体/複数回答)



※「2010年:全体」の降順ソート ※「-」は該当項目なし ※「2010年属性別」は、「2010年:全体」より5ポイント以上高い数値に網掛け ※2006年～2008年調査時の選択肢「AO入試・推薦入試枠の拡大」を、2010年調査で「AO入試枠の拡大」「推薦入試枠の拡大」に分割